

○日に焦けたる顔の手當

海邊に逍遙し、水泳場に遊ぶ場合には、日焦は殆んど防ぐに策ありませぬ。それは勿論コールドクリームなり、キセロールクリームなり、若くは前に掲げた洗劑なりを塗布してその上、日傘を翳し面帕を着用して居れば、比較的多少の防止にはなりますけれど、全然日に焦けぬといふ譯には参りませぬ。それに日焦と云ふ奴は、單にピリ／＼疼痛を感じるばかりでなく、一旦日に焦けた顔が、初め銅色から褐色となり、それから又次第に黄色となり土灰色となりて、この色の褪せ去るまでの間は、容顏のづから粗暴しい相形を描出すものであります。ですから斯る場合には純良なる酒精と蒸餾水との混和液中に浸した布巾で約一時間程も蒸すを宜しと致します。杜

松子酒と水か若くはウイスキーの稀薄なものを使用するも宜しく、特に斯る場合に塗布して快味を覺ゆるものは、精撰されたるオードロンです。これを塗擦りますと、その中の精分は皮下に滲込みて、速かに日焦を除け去ります。て其跡へスキンフッドかキセロールクリーム又はレト等の皮膚攝養劑を塗放しにして置き、間違つても顔を擦つたり、水で洗ひ又は石鹼などを使用してはなりません。そして暫らくしたら、その塗布劑を徐々に拭去るのですが、この方法は顔面を清涼に保ち、聊かも皮膚を損ふなどの心配はありません。

○塵埃——肌膚の敵

毛孔を塞ぎ、皮膚を粗悪にする最も恐るべきものは、夏季の炎暑と強風と、これに吹き捲らるゝ砂塵とであります。斯る場合には是非

外出をせねばならぬ時には、上來屢々記述した皮膚攝養劑の何れかを薄く塗りて豫防するより致方もありませぬが、この際、それが塗布料としては無論クリーム劑でも又は乳劑でも別に差問題はありませぬけれど、その便利なる點に於いてスキンフットを宜しいと致します。と云ふ譯は、このスキンフットは、これを塗ると直ぐ皮下に滲込みて、脂肪氣も光澤氣も残らず、一向に眼立ないからであります。

○夏季の精良洗滌劑

皮膚が炎々たる夏日の光線に照付けられ、或は砂塵に晒暴されて乾燥となり、ヒリ／＼疼痛を覺ゆる時に、これを清涼に保つ良洗劑は、次の如き處方によりて調製なさるが宜しうございます。

硼酸末 一匁

亞硫酸曹達 二匁

グリセリン 半匁

蒸餾水 五匁

薔薇水 十匁

以上五品を混和た溶液を、清淨な小布に浸し、皮膚に塗抹するのです。

○ワゼリン及びグリセリンに就て

近來化粧料として普ねく人口に膾炙し、且つ最も廣く使用されつゝあるものは、硼酸とグリセリンとワゼリンとであります。この中硼酸のみに就ては先に「新式化粧法」に詳述しましたし、グリセリンは復用劑とすべきもの、これを單用すると、却つて皮膚を黒くする

恐れあり、而してワゼリンは、その性質として外出の際に塗用してはなりませぬ、若し之れを使用すると癩て水腫を生ずる患がありま

す。ワゼリンの効力は皮膚を軟滑にし清浄にする點にあるのですけれど、これは必ず夜間に限り用ひらるべきものであつて、日中は他の乳劑若くは胡瓜クリーム類を塗布するを適當と致します。但し現今世に霑がれつゝある多くのクリーム類は、その原料中にワゼリンを含ましてありますから、よく選擇をせんと不可ませぬ。

○日光と皮膚

終日室内にばかり立籠つて、滅多に戸外の空氣に觸れない纖弱な皮膚は、日光の害を蒙むること、常に野外に多く出て居る粗硬い皮膚よりも遙かに激しく且つ速かてあります。

避暑と海水浴に就いての注意

従つて年中都會に生活し、宏樓奥深くに起臥して居る所謂貴婦人とか令嬢とか云はるゝ人々の、夏季に及んで遽かに風粗く日射劇しい海邊に避暑し、而して海水浴に皮膚を光線に晒すが如きは、實に之れ程皮膚を粗悪ならしむるものはありませぬ。併し海水浴は一面身體を壯健にする効力があり、殊に平生深窓にのみ生活して居る婦人方に採りては、非常に必要な方法であるから、これを全廢するといふのも一方美容法に反く譯になります。て若し是非海水浴をやりたいと思ふ場合には、コールドクリームかキセロールクリームを厚目に塗擦して、その上に肉色が新芽色の白粉を打つか、左なくばダルクと澱粉とを等分に混和した無刺激性の撒布劑に赫石かカルミンを少々加へて打つかして、海水帽の周圍に青い若くは赤い薄絹の覆

海邊の沙
風と山間
の清氣

皮膚が粗
悪となり
光澤を失
ふたる場
合には

日光に照
らされた
顔を拭く
時の心得

被を垂下たものを冠るを宜しと致します。けれども毛髪を健全に艶々しくするには、毛髪を日光に晒すより良好はないのですから、この目的の爲めであつたら、海邊の沙風に皮膚を晒さんよりは、山間の清氣に身體を浴させる方が、單に毛髪のために良いのみならず、皮膚の爲めにもなります。

それが若し日光の爲めに皮膚が粗悪となり光澤を失つた場合には、先にも示した如く精良なるクリーム劑を塗用すべく、これを施すに先立ち、薔薇水か稀薄い炭酸加里水で顔を洗滌ふのです。

それからモノ一つ注意すべきことは、顔を拭くのに粗い布片を使つては不可ぬといふことです。殊に日光に當つた後の光る顔などは必ず軟かな絹布で、丁寧に良く拭き去るやうにすべきであります。

○足の疲勞

疲勞れた足には、一握りの食鹽を投れたる微温湯で洗足し、乾いたら、レモン液の少量を擦込みなさい、すると大いに疲勞れを軽減することが出来ます。暑い日に外出して歸り、その都度熱湯で洗足すると疲勞れが除けると申す人がありますが、これは避くべきことで、斯く熱湯で洗足すると、第一足を柔和にし、筋肉を弛め過ぎて甚だ宜しくありません。これを防ぐには濕布を以て足を靜かに擦り、少量の酢を掌上に注ぎ、これにて足肢並びに趾の間を摩擦るがよいと、或る醫學者が申しました。

○發汗止め

過度に汗の發るのは誠に不愉快なもので、殊に化粧した場合に於

いて甚く苦痛を感じるものですが、これを防止するには、コンデー液の少量を混じたる温湯で患部を洗ひ、そして酸化亜鉛、硼酸各二弓、石松子末四弓、澱粉一弓より成る撒布劑を塗布すれば、餘程過激なものでも治すことが出来ます。

○海水浴

婦人、殊に青春婦人にして、海水浴の度が過ぎたる爲めに、肌膚美は申すに及ばず、健康さへ失ふことあるは、私共の能く實見する所ですが、「過ぎたるは及ばざるが如し」と云ふ諺に洩れず、海水浴もまた數時間身を海水に沈め居るために悪感を覚え、水氣を催して素健康の良藥たるべき海水が、却つて害となるに至るのです。若し嗜好に適すとならば、毎日海水に浴するも可いですが、前に

過ぎては害となる

海水浴の適度に關して

述べた如きことのないやう、注意せぬと不可ません。斯く注意さへすれば、それが爲めに皮膚は丈夫に美しく、眼眸は活々と輝いて、體質も健全となり、精神も従つて快活になります。元來鹽水は淡水よりも皮膚に冷たい感じを與ふること微弱なものですから、少し位冷氣い時であつても、浴をとつて差支ない譯です。とは云へ、朝食前の海水浴は、平素健全な身體の人の外は、決して爲すべきものでありません。若し自分の虚弱なる、陰鬱なる容貌又は若皺を除らうと望む人は、朝食後少くとも二時間を経過せんことには、海水に入浴つては不可ませぬ。鹽水は素一つの美顏劑に値するものであるけれども、海水浴をやつた跡にて洗面せず、その乾くに委せて置きもしやうものなら、爲めに皮膚は粗れて光澤を消し、

朝食前の海水浴について

暗色を帯ぶるに至ります。

○鹽水と毛髮

鹽水は毛髮のためには宜しくありません。鹽水は毛髮を灰色にし且つ毛質を粗鬆させます。ですから海水浴には、かたく髪を束ね、帽子を冠るべく、その帽子には防水布のやうなもので製つたのが宜いと思ひます。もし毛髮が濕りもした時には、直ちに水で洗つて日光に乾かすべく、鹽水に濡れた儘乾かすと、毛は丈夫になるが縮れ味を帯びて來ます。

○海水浴の効力に就て

若し腫物、發疹、小瘡、蝨傷、蛇傷などのある場合であつたら、つとめて海水に浴すべく、疼痛を去り皮膚を健全に致します。皮膚

の虚弱なのや不潔を除くには、これに及ぶもの多くありません。

○毛髮に變化を與へよ

近來我邦の婦人にして、帽子を冠る人大部見えるやうですが、これは美髮法から申すと甚だ宜しくないことで、毛髮には空氣の流通を能くすべく、これが一つの攝養法であります。

結髮の如きも、褥に就く際には、弛るく解き放ち、寢室も四方を立籠めず、空氣の流通を妨げぬやう注意すべきであります。

それから毛髮に汗を浸込まさんやう氣をつけねばなりません。でもない、その汗のために毛髮は全く光澤を失ひ、發育を止め、又毛髮の壽命を短縮め、脱毛を招致するに至ります。

○顔料クリーム

子毛髮と帽

褥に就く際の心得

汗と毛髮

適當にして精良なるクリームを求め得られぬ場合には、寧ろ家庭に於いて調製するを安全と致します。そして顔料クリームとしての方劑數ある中に、最も精良なるもの、一つは、上等石鹼一二、〇を細末に削つて磁器に入れ、それに二四〇、〇の蒸餾水を加へ、成るたけ低い温度で溶解し、更に硼砂を末にして八、〇を投れ、別に鯨蠟若くは白蠟一二、〇に杏仁油八〇、〇を混合たものを他の容器に入れ、微温にて溶解し、この兩混合液を和して良く振盪せ、殆んど冷くなつた頃にグリセリン三八〇、〇、酒精二四、〇、薔薇水六五、〇の三液を加へ、更に薔薇油及び橙花油各數滴を投じ、冷却するまで振盪して、磁器中に密閉して貯藏し置き、必要に際し、使用ふだけを取り出し、それを掌上に移して皮膚によく摺込むのです。

○寒暑の激變に對する心得

如何に寒くとも烈火の前に座つてはなりません。若し止むを得ぬ場合であつたら、前の顔料クリームを塗布するか、然らざれば顔を火にそむける様になさらねば不可ませぬ。でもないと思ふうちに皺を生じ、顔肌が粗鬆て參ります。急激なる風に當るも亦同様で、熱さ火のある西洋室の窓口や戸口に立つのも宜しくありません。斯る場合に際し、その害を防ぐには、上等のクリーム劑を塗布すべきであります。

○寒暑と手美の構養關係

顔に次で寒氣に觸ることの多きものは、云ふまでもなく手でありまして、冬季の酷しい寒さの際に、手を綺麗に保つといふことは容

易い業ではありませぬ。

手を寒氣に晒すは宜しくありません。これを寒氣に感觸しめざるには、上質手袋を掛くべく、殊に毛皮付手袋は冬季用として最も適當のもので、酷寒の時に手を暖むるにはマツプを必要と考へます。近來襦袢の袖口を緊平と結ぶ風が大部流行つて參つたやうですが、これは冬季に適し、且つ電車などに乗る場合に腋の下に見えるのを防ぐべき適當のものではあるけれど、春暖から夏季を通して尙且つ斯くの如く袖口を引緊めて居らるゝ人の少なからずあるのは、誠に愚の至りと申すべく、斯くては爲めに手指の滑々として軟らかな美を破壊つて、その結果土灰色に褪せて了ひますから、それは冬季に限ることと御承知なさるべきものであります。

香水の押
して防了
香水の
方法を

○香水の使用と注意

香水といふものは、瓶の封を開けて少しでも使つたが最後ズンと揮發了つて、あとに残れる香水の香さへ色さへ變褪を呈するに至るは、皆様方のトク御承知のことと存じます。

これを防ぎますには、その瓶を開けて使はれたら、その使はれた丈の量、即ち瓶と香水との間に出来る空隙を填めるだけの綺麗な砂を入れて、香水と瓶との間に間隙のないやうにするのです。但し其投入する砂に少しでも水氣があつたり濡つて居たりしてはいけません、香水は非常に水氣を嫌ふもので、少しでも水氣が這入りますと今まで透明であつた液體が直ぐと混濁を呈し、従つて香もわるくな

ヴァイオレットの香
と水との関係

つて了ひます。

若し其等の砂の用意ない場合でしたら、瓶を倒まにして、瓶口と香水との間に隙のないやうになさるも一方です。斯様に致しやすと大に香水の發散を防ぐことか出來ます。こんな事は何でもない話のやうですけれど、一つは經濟の爲め、一つは香水自身の香の悪い變化をさせず、保存する爲めの用となるのですから、試みにやつて御覽なさい。

それから電車に乗つても、劇場に參つても、さては園遊會とか晚餐會とか、兎角多勢の人の集まる場所へ參りまして、最も多く鼻につきまますのは、一種の情緒を刺戟する底の青臭さ匂のする香水、即ちヴァイオレットの香ですが、成程ヴァイオレットも佳い香の中の一

青臭き香
の強きも
の粗製
品なり

つには違ひありませんから、これを多く使はるゝも無理からぬことゝは思ひますけれど、あまりこれのみを御使ひになつては身體の爲めに甚だ宜しくない結果を來しますから殊に若い御婦人方には、餘程の注意を以て御使ひにならぬといけません。

それも精製された品なら、差して大害もありませんけれど、粗悪なものも断じて御使ひになつてはいけないと存じます。

ヴァイオレットは粗悪なる程青臭い香が強く、この青臭い香はヴァイオレット特有のもので、精製された品は、ホンノリと何處かに此青臭さ餘があつて、何とも云へぬ佳い心持のするものですが、それも強く刺戟を感じさせるやうになりますと、むしろ一種の厭ふべきものとなります。

レツアイオ
は恐るべ
き青酸と
をいふ毒
を含めり

唯それ其香の厭ふべきものであると云ふだけなら、安香水の致す所と諦めもしませうが、この青臭い香こそは、私が世の御婦人方にこれを御使ひになることの恐るべきものであると申上ぐる、最大理由の存する點なのであります。

皆様は青酸といふ薬を御聞きになつたとがありませんか、これは一滴の量よく人命を危態に陥る、だけの強大な力をもつて居る、毒薬中の大毒薬で、その猛烈なることモルヒネを凌ぎ、ピロカルピンの墨を磨すといふ程の毒薬であります。

ヴァイオレットの青臭い香は、この青酸の含まれて居るが爲めなのです。

もとヴァオレット油をスミレから取り出すには、他の香料の抽出

法と違つて、今の處、どうしても硫化水素を通じて取るより致方が

ありませんので、この硫化水素に其油は化合して青化水素となりま

すから、茲にあの青臭い香を呈しますので、多く青臭いだけそれだ

け硫化水素が其香水に多く含まれてあるのですから、ヴァイオレッ

トの安香水程多く硫化水素を含んで居るといふことが解るのです。

そこですから、試みに其青臭い香の高いヴァイオレットを瓶のま

ゝ暫し嗅いで居て御覧なさい、恰かも魔酔薬でも掛けられて、穴の

中へでも引込まれるやうな心持になります。

是と云ふのは、右に申した青酸の中毒を起すからのもて、青酸を飲

めば素よりのと、唯永く嗅いで居りましても神経衰弱にかゝります。

されば年のお若い御婦人方は、さなきだに處女病とか申して居る

ヴァイ
ットの香

は人體を
衰弱せしむ

萎黄症にかゝり易い體質を持つて居なさる處へ、このヴァイオレット香水を盛に御使ひになつて其香の刺戟を始終受けて居られたら、容顔自ら青醒め、仕事をすることも憂く、頭痛を覺えたり、氣が沈んで物事を苦にするといふ、一種のヒステリー症を招致することゝなるのです。

嘗て私は私の佛蘭西語の先生に聞いたことがあります。巴里の交際界にビオラーの御嬢様といふ一つの隠語がある。これは神経質にして顔色の蒼醒めた婦人を誘ふ言葉であるとのことでしたが、如何さま、ヴァイオレットの害毒を註し得て面白い隠語だと感じました。とは云へ、精製されたヴァイオレットの香は、その花の愛らしく優しさに似て、優雅な、而して殊に男の愛く、その青臭い香の交つ

世界三大
流行の香
水

ヴァイオ
レット香
水より受
ける害毒
を防ぐ方
法

てブリンと鼻神経を刺戟するの特長に至つては、所有香水中、また棄つるに忍びん佳い處がありますので、今以て、啻に我邦ばかりでなく、歐米に於ても、ローズ及びフェリトロップと共に世界三大流行の香水として持てはやされて居るのです。ですから、これを使つてはいけない、斷じて身に觸れさしてはならぬとの禁札を立てるのは、少々残酷の言分かも知れませんが、是非このヴァイオレットを使ひたいと思召す御方は、成るべく精良品を御選になると同時に、一方興奮性の香水、例へばローズマリーを含んである香水とか、ラベンダーで製された香水とかを御求めになつて、これとチャンポンに御使ひなさつたらいくら其の害毒を防ぐことが出来るかと思ひます。

ローズマリーを含む
の香水と
オールド
ロンドコ

萬能香水
の調製法

ローズマリーを含んである香水として、最も適當なものは、差當り精製されたオールドコロン、俗に萬能香水と呼ぶものが宜しいでせう。このオールドコロンといふ香水は、もと佛國コロンといふ地から天然に出たものを、今では人工的に製すやうになつたもので、私の知つて居るのばかりでも、その製造會社によつて製粗の差異あること正に十四通りを計上することが出来ます。ですからこれをよく御承知になつて居られませんと、拙らぬ下等品を御求めにならぬとも限りませんし、又その様な粗製品では、何の役にも立たないことになりまますから、むしろ御手数數でも、御各自御自製になられた方が、經濟ではあり、第一安全であると思ひます。

なさいますし。

- ベルガモット油 五、〇
- ローズマリー油 二、五
- 枸橼油 二、五
- ラヴェンダー油 〇、五
- 橙花油 〇、五
- 丁香油 〇、五
- ウインダークリエーン油 〇、〇五
- イランイラン油 〇、〇五
- 醋酸依的兒 〇、五
- 稀醋酸 〇、五
- 酒精 四二二、五

蒸餾水

七五、〇

この處方なれば先に申したラベンダーもローズマリーと一所に這入りますから、申分のない上等なオードロンが出来上るであらうと存じます。

〇冷水浴の新法式

冷水浴は人體の健康に大層よいと唱ふる方もあるし、又その體質によつては却つて害になると云はるゝ人もありますが、それはこれが法式の如何によるので、私の實驗によりますと、冷水を浴びるといふことは、常に健康の上に効果あるばかりでなく皮膚美を發揮せしむる側から見ても、頗ぶる有要なものと思ひます。

冷水浴のやり方

或人がその體質によつて害ともなると云はるゝのは、體質の弱い人が冷水をマドモに浴びますと息がつまるやうになつて、時に悪感さへ覺えるので、それがために寒胃にでもかゝつては不可んからといふにあるらしいですが、これは其浴方を御承知ないからのことで、その浴方に至つては、他の冷水有効説を唱へて居る方々にも知つて居らるゝが稀のやうに存ぜられます。

ではドンな風に浴びるのかと申しますと、最初からマドモに全身に浴びては、いかに體質の強い人でも、たまつたものでありません。それには先づ脚を並べて立つて、其脚部の膝の下から、桶に汲んだ冷水を掛け、徐々に腰の邊まで浴せ上げて參つたら、腰部の左右から前うしろといふ順に浴けるのです。斯くて胸部に及んで、矢張り

脚部よりはじめよ

健全美肌の方法

左右前後に浴せ、咽喉の直下にまで進んで參つたら、茲に始めて肩の上から浴びるのです。

この方式の順序によつて浴びますれば、如何なる體質の人でも決して害になるやうなことはありません、モウ腰部から腹部まで浴けて參ると、何とも云へぬ壯快な氣持が全身にみなぎつて來て、止めたくも止められないやうになります。

殊に皮膚美養成としての冷水浴は夏季に於いて最も必要、且つ効驗の著るしいものでありますから、その健康の爲めに冬季を通じて年中冷水浴に身をかためやうとなさる方々にも、その練習として、右の方法により夏季より御はじめになつたら誠に一舉兩得な健全美肌の遺方てがなあらうと存じます。

浴後の手當

斯く冷水を浴びられた後、洗面器に溫湯を八分目程汲つたものへ、前に申したオードロンをウキスキ用コップに半分和入れまして、それで全身を御拭きになると、皮膚はいつしか肌理細かになり、氣も軽く、頭も明瞭くなつたやうな心地にさへなります。

猶ほ美身法としての冷水浴に、油を塗つて置いてやる方法もありますけれど、中等以下の生活をして居る人には、ちよつと遣り切れなすまいから、今は略すことにしませう。

モ一つ、世間には牛乳浴が大層皮膚によいと申して、中には大金を惜まずに、これを實行して居なさる方もあり、現に私の知つて居る或大家の御夫人や令嬢方が、佛西蘭歸りの誰とやらに聞かされたとか仰つて、毎日牛乳五升づゝを風呂に混ぜて遣つて居なすつた

牛乳浴について

クリーム
と牛乳と
は別なり

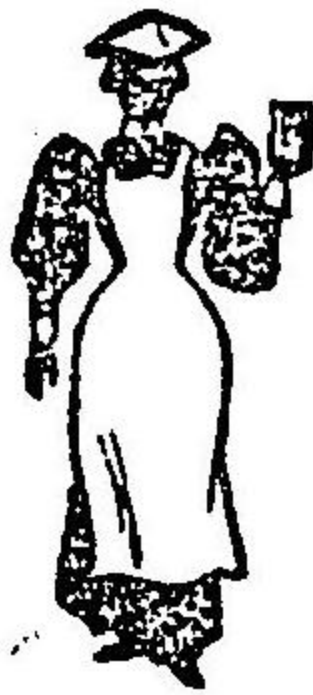
が、別段綺麗にもならないので、私の説を探られて今ではお止めになつて居ますが、佛國ではナポレオンの最初の皇后ジョセフヒンが、これを御愛用になつたとやら申すので、それを真面目に真似る御婦人もあるらしいのですけれど、要するに牛乳は、左までに人體美を助けるものではないのであります。俗説に過ぎません。

ではクリームも左して皮膚のためにならぬかと御尋ねになる方があるかも知れませんが、これも恐らく、クリームとは牛乳で調へるものだとの誤解からの疑問であると思ひますが、精良なクリームの皮膚によいものなることは論を俟たぬ話で、これは植物性乳劑と申して、牛乳とは何の関係もないのです。

併し脂肪油も皮膚にわるいものばかりと申す譯ではないのですか

ら、牛乳として使つてよくないと云ふのではありません、唯その高價の犠牲に對等するだけの効能あるものでないと申すだけのことではありません。

クリームのことには就いては、前章に精しく述べて置きましたから茲に改めて述べる必要はありません。



餘録三題

(其一) お化粧の秘傳 (煉おしろいのつけ方)

お化粧の仕方は、粉おしろいと、水おしろいと、煉おしろいとで違ひます。

茲には世にもつとも廣く使用はれて居る煉おしろいのお化粧の仕方についての秘傳を申上げること致しませう。

一般、御婦人方のお化粧の仕方を拜見するに、多くは先づ石鹼とか洗粉で洗面なまつて、或る化粧下を御つけになつた上に、おしろいを手掌に取り、鼻から顔全面に一度に御塗りになるのが、御定り

になつて居るやうに思はれます。

斯様な仕方では、到底化粧美を發揮させると云ふわけには参りません。それも俗に羽二重肌とか申す肌理の緻密な御方なればまだしも、それですら、第一おしろいのノビがわるく、ムラになつて、落付きにくく、直ぐに剝けて了ひます。

それには何れのおしろいでも、お化粧の仕方さへ法に適つてをりますと、ノビもよく、ムラなども出したくも出ず、平らについて、よく落付き、光澤さへ添はつて、今朝したお化粧が、翌朝位までは必ず其儘剝げず、褪せずに着いて居ります。

ては如何したら、その様な工合に行くかと申すと、そこが即ち秘傳の存する所なのです。

併し秘傳なんて申すと、手品が魔術のやうに心得たり、又は普通の方々には六ヶ敷くて出来ぬことかのやうに思召さるゝ向もあるやうですが、何も別に其様な種仕掛あつたり、或人には出来るが、或人には出来ぬといふやうな格別面倒なものではないのです。

と云ふたら又或人は、そんな事なら改めて秘傳なんて大層なことを云はんでも普通のことには過ぎんてはないかと仰しやるかも知れません。

左様、二と二を併せて四となると申すが普通の數理であつて、如何に秘傳あると申しても二と二で五となるといふ道理のない以上、秘傳も普通のことには違ひはないのです。

現に生花の術に於いて、水上の法と申すがあつて、之を秘傳ぢやとしてあります。併しこれを聞いて見ると、全く譯もないこととして、誰にも直ぐ出来るわざであるが、それは其秘傳を知つたる上のこと、これを知らん人には如何して水上するかは、チョット出来ぬ藝當でせう。

それと同じ様に、化粧の仕方も、これから私が申上げる所を御覽になつて、これを實地に應用なさつて試られたら、生花に於ける水上法の許しを得られた夫れと等しく、雜作もなく化粧美を發揮させることが出来なされるに違ひありません。

けれども、世の化粧に苦心なされる多くの御婦人方が、同じ化粧をなさりながら、何故前に申上げたやうな醜怪仕方を行つて居らつしやるのですか、これ即ち二と二と合せて四となるといふ普通の數

理たる其秘傳を御存知ないからではありませんか。でもなければ、同じお化粧をなさるに、誰が何を苦んで、わざと醜化のお化粧をなさるものですか。

繪に描いた餅ではお腹の役には立ちません。まア理窟はヌキとして、論より證據、チヨット貴方のお顔を貸しなさい、斯ういふ具合にやるのです。

第一お化粧しますには、おしろいの適量を手掌に取つて、それを提頭でよくマゼ合はさないといいけません。でもない、如何程手際よくお化粧なさつても、後からおしろいが浮き出て、粉のふいたやうに荒け出し、光澤を失なつて海綿を覆つたやうになります。

さて指頭でよくマゼ合せたら、そのおしろいを先づ額に少しつけ

て、これを指頭で静かに廻しながら、ムラのないやうに延すのです。

斯くし終つたら、今度は兩眉の上の方から眉の間、眉と眼の間につけて、前と同様、ムラのないやう徐かに延し、それから段々顔全體につけては延し、つけては延すのですが、それには兩の頬、鼻の上から鼻の兩側、口の上下左右耳の後、首筋、咽喉と、一所づつ塗けては、指頭で徐々と廻しながら延すのです。

この仕方は、如何なる顔格好の人でも、おしろいを能く落付かせ、ハビよく光澤を出して、ムラなく永く剥げさせない秘傳の一つで、多くの御婦人方のお化粧の仕方に見るやうに、澤山のおしろいを一時に手掌に取り、それを兩掌にコスリ付けて、鼻や額、又は頬などに初めから一度に塗けて置いて、後から夫れを延ばさうとなさ

るから、先に塗けたおしろいは、顔の暖りと風のあたりたるとにて乾きかたまつて延びがたく、おしろいの光澤は消え、其所に固りさへ出来て、トンと落付かんことになるのです。

すから私が申上げるやうに、額から初めて一所づつ、段々と指で延ばし、おしろいが愈々顔全體に行渡つた時、眉刷毛に水を少し含ませ、それで幾度も軽く丁寧にお化粧した上を刷いて御覧なさい、おしろいがよくノビ、綺麗に落付いて光澤よく、翌朝まで剥げるやうなことは受合つてありませんから。

この仕方御遣りになれば、「クラブ白粉」でも、「御園おしろい」でも、「大學おしろい」でも、「菊の露おしろい」でも、皆同じ好結果を得らるゝに違ひありません。

けれども此等の煉おしろいの或物には、マグネシアの割合に多く含まれてあるのがあつて、お化粧すると直ぐ水眉刷毛で刷りますと、却つてムラになることがありますから、前の如くお化粧してしまつたら、暫し顔に風を受けて後、半紙なり美濃紙なりの類を顔に當て、其上から例の如く水眉刷毛を御使ひになるが安全な遣方で、おしろいも一入綺麗に落付きます。但し杉原とかノベ紙とかの類を當てることは禁物です。

併し煉おしろいのみでも化粧した顔は、稍もすると何處ともなく凄味を帯び、エラ／＼して見える缺點があります。この缺點を補つて、クツキリと顔を和らがしく見せますには、前の如くお化粧して了つた上に、乾いた眉刷毛で粉おしろいをムラなく打ち、扇で静に

顔をあをぎ、その上を又前と同様。紙をあて、刷くのです。

それから眼の上や眼尻の邊に、少しでもおしろいが濃くつくと、宛で假面を被つたやうに見えるものですから、化粧が濟んだら、少ししめつた手拭で、目の上と目尻を軽くソツと押へ、眸、臉を、その手拭でソツと摩ると、顔全體のお化粧が薄く見えるやうになります。

この遣方は皆様方の御都合で、先にお化粧なさる時に、眸の邊りを除けておしろいを塗り、後から手に附いたおしろいを残した所へ指で摺付けても差支ありません。

鼻には誰方も他の部分より濃目にお化粧なさることは先刻御存知の話で、現に其通り御實行になつて居られますけれど、その遣方が

また極めて拙く、それが爲めに、見る人をして常に鼻の高からぬを認めしむるのみならず、顔全體の調和美を破つて御座る御方が、少なからず御見受け申すも亦事實の様に考へられます。

顔全體の化粧美に調和して、鼻を高く見すべく此部分におしろいを濃く塗つて、其對照美をそこなはないやうにお化粧しますには、鼻筋から鼻梁にかけて、おしろいを少し濃く塗り、鼻の上より下方へ向けて刷きかけて置くのです。この際最も注意を要すことは、濃い所と薄い所の境目が際立ちて見えぬやう念を入れることです。

併しおしろいを手際よく塗けますのに、一番六ヶ敷い所は生際に上越すものはありません。殊に地色の黒い皮膚の人は、この生際のお化粧の出来榮如何によつて、顔に塗けたおしろいが能役者が山姥

の假面を被つたやうに、生際の所で、地色としろいどが判然と分
界線を描き出すことになり、むしろ初めより化粧せぬにも劣つた
醜惡を現出すること、私共の屢々實見する所であります。

これと申すも、詮りは生際にしろいを際立て、塗りなざるから
のことで、其所を際立てずに塗けまするは、自らまた一つの仕方があ
るのです。その仕方を「はき込み白粉の法」と云ひまして、地の黒
い人の化粧には、是非く知つて置かねばならぬ秘傳の一つであ
ります。

これとて遣つて見ますと、譯もなく出来ることで、前髪の生際、
首筋、耳の後等の生際のすべてに、粉としろいを乾いた刷毛で斑な
く能く摺付けて置き、それを眞のない筆の先を切つたものにて生際の

中へ静かにはき込み、髪にクツ付いたしろいは櫛で軽く搔き上げ
ると、サツパリと取去ることが出来ますし、生際には自ら脂肪氣が
ありますから、はき込んだしろいは見事に落付きます、而して額
に残つた白粉は、絹を指頭に懸けて綺麗に拭き取り、其上で前に申
述べた化粧の仕方て練し、しろいを塗けるのです。左様しますと初
めにはき込みましたし、しろいは地色の白い皮膚のやうに見えて、從
つて化粧が際立ちません。

この「はき込み白粉」の法は、番に生際を際立たせず、黒い地肌
を隠して見せるのみならず、丸い顔を長く見せる場合にも必要な遣
方ですが、これは何れ題を改めて申上げることには致しませう。

場合によつてはこの「はき込み白粉」の代りに「湯化粧の法」を

應用されても差支ありません。元來「湯化粧」と申すは、顔をホンノリと櫻色に見せる爲めに、極めて薄くお化粧しやうとなさる時に用ゆる法であるのですけれど、極の薄化粧であるだけに、「はき込みおしろい」の代用となる譯で、これを致しますに二つの遣方がございます。

湯をつかひ、糠袋で顔を丁寧洗つて、薄くおしろいを塗り、手拭を熱湯にてしぼり、お化粧した上をおさへて置く、これが其一法です。

第二の法は、矢張り湯に這入つて糠袋でよく洗面してから、おしろいを顔に普通よりも濃く塗り、指頭で肌のキメによく摺込み、少し間を置いて、糠袋なり手拭なりで、顔を洗ふのです。斯くて又

薄くおしろいを摺込み、又手拭で拭き取ると、宛らの地肌のやう誰が見てもお化粧して居る顔とは思へん程綺麗に落付きます。

この第二の湯化粧法を日々の日課に、長く遣つて居りますと、色も自然と白玉のやうになり、光澤やかに、肌理も細密になります。

俗に垢抜けのした顔と申すのは、この法を應用した結果であります。

全體おしろいが浮いて落付かないのは、顔に膩垢が浮遊て居るが爲めて、お化粧に先立ち顔を洗ひますのは、申すまでもなく此膩垢を落し去る爲ですから、洗面劑、即ち洗粉とか石鹼とかいふものは、正に此目的に適應する品質のものを選ぶべきが當然の話で、何が最も洗顔に適當であるかと云ひますと、簡便なものでは餅米の無砂糠に優るものはありません。でもなければ、少々御面倒でも、綠豆五

合あに、白芷びやくし、白檀びやくたん、白附子はくぶし、甘松かんしやう、滑石くわく各四ごう匁もんめづゝ、それに龍腦りゆうなん二匁もんめ、人造麝香じんぞうじやかう五分ごぶんを加くわへ、一いつたん絹篩きぬふるいにかけ、葛くわを等分とうぶんに交まぜ、湯ゆをつかふ時に、少量せうりやうを手掌てのひらにて溶といて顔かほに摺すり込こむか、或あるひは糠袋ぬかぶくろに入いれて洗あらひなさるがよい。

若もし又平常またふだん乾燥性あられしやうの人ひとでありましたら、右みぎの洗面劑せんめんざいを純粹じゆんずるの胡こ摩油まらぶらで溶といて、化粧けしやうなさる前に、少量せうしばかり顔かほに塗ぬりますと、おしろいは綺麗きれいに落付おちつきます。

茲こゝに一言げんご申し添そへて置おきたいのは、糠袋ぬかぶくろに使つかふ布ふと手入方ていれかたです。布地きれぢは地のよい晒木綿さらしめんか紅木綿べにめんの類るるを用もちゆべく、絲いとの太ふとい木綿めんや、藍染あゐぞめ又は縞しまの類るるの荒あらい布ふは必ず使つかつては不可いけません。

又糠袋またぬかぶくろを使つかひ了おりましたら、表おもてや裏うらや縫目ぬいめなどに、糠ぬかの滓かすの残のこつ

て居ゐないやう丁寧ていねいに洗あらひ落おしなさい、少せうしても使つかひ滓かすの残のこつて居ゐる袋ふくろを遣つかひますと顔かほを荒あすのみならず、腫物ふくてもものさへ發はつ生せい致いたします、糠袋ぬかぶくろの布地きれぢとして最もつとも適てき當たうなのは、紅染べにぞめの絹きぬに如しくものはないと存ぞんじます。

地色ぢいろの黒くろい顔かほの人ひとの化粧けしやうも面倒めんだうですが、蒼あそい顔かほも中々なかなか難義なんぎなものです。設令よしも化粧けしやうの仕方しかたを手際てぎはよく遣やりましたも、おしろいに生い々いしい光澤くわつやなく、顔かほは沈しづんで引立ひきたちませんで、花柳界くわりうかいの女性ぢよしやうの中うちには、據よんどころなく化粧けしやうする前に、地肌ちばだへ猩燕脂しやうえんじとか紅べにとかを塗ぬりつけて、一時じを糊塗こまかす者ものがあります。

けれども斯こんな遣方やりかたを度々たびたびやりますと、肌膚はだが紅べにや猩燕脂しやうえんじに焦こげて黒くろみ出だしたり、赫あから赤あかんだりしますから、決けつして此このやう様な偽いつはり化粧けしやうをな

さつてはならないことと思ひます。

蒼い顔をホン、ハリと櫻色に見せますには、右に述べた「湯化粧」を致しました後、普通の化粧をなさつて、眼の上をソツとしめつた手拭で拭ひ、而して紅なり猩燕脂なりを肉色程の色に溶き、眼の上、瞼の間、頬の邊り、生下りから下へかけて薄く刷きかけ、その上をあしるいの付いてる眉刷毛でソツと打くのです。斯様に致しますれば、紅の上に薄くあしるいが掛りまして如何なる蒼い顔の人でもホン、ハリと櫻色に見えますし、従つて紅焦などにはなりません。御好みによつては紅などの代りに「肉色あしるい」を御使ひになるのも宜しいでせう。

猶ほ一般化粧の仕方の秘傳として、久しく化粧を中止して居つ

た人の顔や、俄かに化粧しやうとする場合などに、あしるいを綺麗に落付かせ、ムラになつたり、寄つたりしないやうにする、所謂「一夜化粧の仕方」や、「紅の挿方」眉の作り方、等も申上ぐべき筈ですが、大變な長談義になりましたから、其はいづれ追つての御話とします。

(其二) 新しき化粧の秘術(粉おしるいのうち方)

化粧と申せば白粉を豫想し、化粧の巧拙は即ち白粉の使い方一つによるのであります、併し其白粉の使ひ方には、夫れ々の順序もあり方式もあります。充分なる化粧美を發揮するにはどうしても其方式と順序とに熟練する必要がございます、私は夫れに就いて一

通りの御話を致したいと思ひます。

一 如何すればおしろいが落付くか

先づ順序としておしろいを巧く延ばし、斑のないやう。平らに落付かせる方式から御話しなければなりません。併し家事やその他の事情で、永いこと白粉に遠ざかつた方とか、又は曾てお化粧といふものを遣られた経験のない人、若くは女生徒が活人畫の演者となるとき、俄かに粉飾をせねばならぬ時に、中々思ふやうに巧くおしろいの乗らぬ事があります。其點に就いて少し申しますと、斯かる場合には「一夜化粧の秘傳」と云ふ一つの方式があります。是れは舊幕府の大奥などに行はれたものですから、新しき化粧方とは云へませぬが御存知ない方には、矢張り一つの新式と云ふても差支あるま

いと思ひます。

もと此「一夜化粧の秘傳」は、大奥の老女が發明した方式で、例へば殿様の御目に留つて市内の賤女が、御前に御目通りをするといふやうな場合などに、その前夜臥床につくに先立ち、モチ米の純粹なヌカとフスマとを等分に合せたモチ袋で、よく洗面し、おしろいを顔の肌理へよく摺込み、その上へ通常よりも厚目に化粧して、その儘寝につき、翌朝起きて又前のモチ袋で洗ひ落し、而してお化粧をするのであります。かうすればどんなノリのわるい顔の人でも、見事におしろいが落付きます。それは單に初めてお化粧する人に限つたことではなく、常におしろいのノリがわるく、落付きのよくない方にも無論應用の出来る方式であります。

二 指は自然性の美顔器

けれども調和對照圓滿の化粧美を發揮するには一夜化粧ではいけません、而して眞の化粧をするには練おしろいよりも粉おしろいにする方がよい事は、私は多年實驗の上から斷言しますのみならず、化粧美學の原則から申しましたも動かすとの出來ぬ事でありませぬ。

さて粉おしろいの粉飾をするには、無論平日から化粧の土臺となる皮膚をナラして置く必要があるのです、其一方法として、近來美術と云ふのが行はれてゐますが、是れは顔にシミ込んだ塵垢を毛穴から除き去るので、一時皮膚が綺麗になつたかの如く見えますが、人體に不自然なる手術、即ちローラやカッツなどの器械を使用するために皮膚の弾力を弱め、其結果俗に云ふチリメン皺が顔一面に發生

することゝなりますし、其上美顔術はどうしても人手を借らねばならぬから、家庭的とは云へませぬ。云はゞ男子に於ける理髪と同様の性質を帯びて居て自身家庭で應用するには不便ですから、私は化粧美術の上から所謂美顔術なるものを探りたくないので。況んや天は人體の皮膚を美化するために指といふ自然製の美顔器を誰にも附與してあるのですから、不自然な美顔術を行ふよりも、先づタオルを熱湯に浸し、堅くしぼつてそれを顔に當て、ポトと上氣を覺える程度の時間蒸しまして、それからコールドクリームを濃目に顔に塗りその上を指頭で丁寧に摩擦しながらよく摺込むのです。するとクリームは段々と皮膚に沁込んで、残つたカスは不快な灰色状を呈します。それを美濃紙が半紙で軽く拭き取り、洗面器に微温湯を汲み、

その中へ、オードトワレットなりキセロールビネーグルなり、若くはベンゾイン、カンフル、醋酸各五、〇を酒精八三、〇に混合した液を十滴乃至三十滴（常に漏脂性の人は其度に準して多く）滴らしたもので顔を洗ひ、又湯を代へては約三四回右の如く洗面し、五六分の間顔を風に當て、其上にキセロールクリームをムラなく平坦に塗りボツと若くは小羊のナメシ皮で粉おしろいを打つておけば、如何なるのわるい、落付のよくない肌膚の人でも、キツとお化粧がよく出来上るに違ひないと存じます。

三 如何したら長くおしろいは剥げぬか

次には折角お化粧は出来ても終日の間よく落付いてゐるかどうかとの問題であります。勿論右の如くしてお化粧したおしろいは、そ

の時のみ落付いて直ぐ剥げて了うやうなことはないのですが、受合つて翌朝までも剥落させずに置くといふ場合には、前に述べた化粧下クリーム即ちセロールクリームの塗り方と粉おしろいの打様に、一つの秘傳があるのです。それは右のクリームを付けるのに、濃いのを直ぐにベタ／＼塗立てれば不可ません、先づクリームの適量を掌底にとり、其量の約四分一量の橙花水を滴し、その中に粉おしろいを少し混和てムラなく練合せ、それを一度につけずに僅少づゝ顔全體に塗り、乾くのを待つて又くり返し塗けるのです。而して今度は粉おしろいを最初から多く濃く打たずに、極めて薄く少量つゞ打つては又其上に薄目に打ち、適度に至つて止めるのです。それが漏脂性の人でしたらナフトール〇、五、タンノブロミン及びカムフル各

二、五を酒精一〇〇、〇に溶解させた液を手掌に滴して化粧した上を押へる、若し乾燥性の人でしたら、白降汞二、〇、アントラゾール四、〇、ラノリン四〇、〇の混和劑を手掌に塗り、その手で顔を押へておく、猶常に鼻端や口の周圍などが汗ばんで化粧が動くやうな人でしたら、化粧下クリームを塗る前に、プエストゾールを其多汗部分につけておけば、終日も化粧の剝げ動くといふやうなことはありません。

四 おしろいを打つ順序

化粧の一般は以上で盡しましたが、更に大切な事がまだ残つてゐます、夫は前の如くキセルクリームを塗つた上に打つおしろいのつけ方の順序です。此順序を誤ると折角の化粧も、只綺麗に出来

たといふだけで、所謂化粧榮が致しません、それでは化粧する目的の大半を失ふ譯となります。

おしろいを打つ順序と云へば大抵の人は鼻を先にして次で顔全面を一度に塗り、それを後から眉刷毛で延ばしてゐるやうですが、それではおしろいのノビが悪くムラになるばかりです。といふ理由は斯う一度に塗つては一方をノバして居る間に他の部分のおしろいが皮膚の熱で乾いて了ひ乾けば皮膚に密着くから後から水刷毛で延ばそうとしても上部だけは延びても、皮膚に密着いた下部分はいくら動かさずに残ります。それを強いて延ばさうとして、猶ほも水刷毛を使ふと自然ムラが出来ます、最初よい加減に解いたおしろいを其儘つければこそ、化粧も平坦になるのですが、後から水刷毛で無理を

しては到底よく出来る筈はありません。殊に鼻の端にお白粉をつけるのは滑稽であります、何故なれば顔一面につけ終つた時に、鼻へは先へつけたからと捨て、おく譯にはゆかない、先につけても着けなくとも鼻はやつぱり後でどうかする必要があるのです。尤も鼻を高く見する爲めには、他の部分より濃目につけるといふ舊式な化粧法からの割出して、二度までも鼻につける必要があると思ふ人もあるてせうが、それは大なる誤です。鼻全部に厚目の化粧をしたからとて高く見えるものではありません、却つて顔全體の化粧的調和と對照美とを破棄して、他所から持つて來て顔の真中に附着けた鼻のやうになります。

乃てあしるいをつける順序は如何すれば可いかと云ふに、面倒で

も少量づゝを指先に取つて最初に兩眼の周圍から塗けはじめ、それを念入りによく延ばして、漸次に頬へと指先で塗けては延ばし塗けては延ばしして、額と口の周圍及び顎、並に鼻を残すのです。それから口の上部から左右、下部といふ順序で塗け且つ延ばして額に及び最後に鼻につけるのですが、鼻には只眼の兩側に連る低い部分だけに、やゝ他部分よりも濃目につけ、鼻の兩側と鼻端及び小鼻にはつけないやうにし、而して其低い所に立一文字に塗けたあしるいを別の眉刷毛で、鼻端にむけサツと刷掛けて置くだけでよいので、斯うすると鼻筋が通つて見え、従つて高くも見えます。それには少々熱練と呼吸とを要すこと勿論ですが、習ふより慣れるで度重なる間に自然巧みになるものです。

それから大方の婦人は、顔よりも首筋を先にするやうですが、これも誤つた化粧法です。化粧は顔が主で首筋は従です、然るに最初に首筋へ化粧して了つては、後から顔の化粧をする時、自然その首筋の化粧の出来榮に牽制されることとなり、自然顔と首とのあしろいが調和せぬ事になります、ですから首筋は無論、顔より比較的濃目につくべきではありませんけれども、それは顔の出来榮に對比して調和の美をきづつけぬ様に、後から扮飾をするのが可からうと考へます。

モ一つ化粧の出来榮の上から注意せねばならぬことは、如何に巧みにも扮飾をしても、上脛が少しでも濃過ぎると、顔全體のあしろいが目立つ恐れがありますから、化粧がすんだら、ぬれ手拭で

ソツと目の上、殊に目尻に接近した邊を拭き、カルミンを極めて薄く肉色ほどにアンモニア水で溶いた色素を目立たぬやうにつける必要があります。さうすると顔全體に生氣が出て、グツと化粧美が現はれて來るのです。(以上の順序方法は粉あしろいの時も煉あしろいの時も同様であります)。

(其三) 夜の化粧法

化粧と申しても一樣ではありません、秋の化粧と春の化粧と違ふやうに白晝と夜間の化粧の仕方も異つて居ります。

私は茲に成るべく理論を避けて、直ちに其實際につき御話致したい心算ですが、化粧と申せば、單にあしろいをゴタクタ塗立て

るに過ぎんものだ位に思ふて居なされる御方々のために、一應その理由柄を申上げることには致しませう。

もと化粧術は、繪畫、彫刻、音樂等と並行して獨立すべき、一種の美術であると申されませう。

美術としての化粧は、色彩の調和と對照との圓滿を極致の理想と致します。夫故に化粧の仕方は常に其人各自一様に遣ることの出来るものでないのみならず、其時の服裝、髪容、季節の寒暖、室内外郊に於ける周圍の配景と廣狹、さては春の晨、秋の夕、まじどもにうららかな日光に輝らし出さるゝ園遊會の芝生の上を歩む時と横ざまに露に包まれたらんやうな電燈の光に描き出さるゝ舞踏會の宴に席を占むる時とは、自らも化粧の仕方に違ひを生じて來ます、否

違はせねば、その調和美と對照美との圓滿を見、又見することが出來ぬのであります。

誤まつた今日の化粧法

電車や劇場、其他種々なる集會で盛裝を凝らされて居る御婦人方の化粧の遺方を拜見するごとに、美術としての化粧の美的理想を實驗されて居らるゝ人の極めて稀なるを、衷心から遺憾に存じて居ります。成程服裝と云ひ、髪容と云ひ中々申分なく着飾つて居らるゝ方もないではありませんが、惜しや化粧の仕方の拙なるがため延いて其服裝美や髪容美の調和と對照とまでもメチャク／＼にして居つて居らるゝこと、往々にして見る事態であります。現に衣服の色合の如きも、その人の年齢、その時の季節等によつて違はせねばな

らぬことは、誰人も御承知のこと、思ひますが、顔容美の扮飾とて
もそれと異なる譯のあるべき筈はないのです。

所が世の多くの御婦人方のお化粧のなされ方を見ますと、季節が
春であらうと秋であらうと、場所が室内であらうと、外園であらう
と、又は白晝だらうが夜間だらうが、その夜間でも御自分の御顔を
描き出すべき光線が、天邊の月によるか、電燈か、瓦斯かといふこ
とにも御考を及ぼさず、さては御自分の今日の化粧の出来榮と如
何なる色合の衣服が調和もし對照美をなすかとの御注意さへ缺かれ
て居るやうに思はれます。

一口に化粧法と申しますと、只その皮膚をドウするとかコウする
とか云ふに過ぎないので、お化粧の本領とも申すべき扮飾上の仕方

たつては何も云つて居りません。

先にも一寸申し述べた如く、白晝のお化粧の仕方と夜間のお化粧
の遣口とは違はせねばなりません、と申すは化粧と光線との關係か
ら割出されて参りますこととて、これを精しく申上げる様にしますと
優に一部の書ともなりますから、白晝の光線即ち太陽の光は、暖
かき、強き、明瞭な光線であるに反して、夜間の光線即ち月、電
燈、瓦斯等の光は、冷たき、弱き、暗影の含まれて居る光線である
と、先づ御心得置き下さればよろしうございます。

光線……真暗であつたら美も醜も化粧も服装も解る筈なく、光線
によつて初めて美醜が描出さるゝといふことは、私の申すまでもな
く誰方にも御承知のこととせう、而して其美たり醜たりを分明に描

さ出す所の光線に、明暗強弱杯の差違があつたり、その描出さるべき對照物の美醜の顯現にて、從つて異別の生じて來ること素より當然の理勢ではありますまいか。

然らば白晝に扮飾した其の化粧がよく、調和對照の美を實現して他より見られたとしても、其の化粧を以て直ちに夜間のそれとしての對照調和の美を恣にするこの出來ぬものであるといふ理合も自ら首肯かるること、存じます。

夜の化粧の仕度

ては夜の化粧はドヤしたら宜いてせうか。これを正確に決めますには、本來から申すと、服装の色合や、御顔の格好、及び肌膚の色澤等を調べて掛らなければならぬのですけれど、それを一々申上

げて居つては大變ですから、茲には大體についての方式を申上げて御免蒙むることに致しませう。

夜の化粧（精しく申すと月光、電燈、瓦斯等の光線下及び室内室外等に於いて違ひありますけれど、今は旨として室内に於ける電燈と瓦斯等の光線下に於ける仕方について述べます）を申上げるには一面畫の化粧法を述べませんと、少々御わかりにくいかも知れませんが、お化粧するまでの間、即ち化粧下をお塗りになるまでは、晝夜によつて何の違ひもありませんので、例せば精製されたる石鹼又は撰良なる洗粉で洗顔して、若し一層念入りにする場合には、タオルを熱湯に浸してそれを堅くしぼり、顔に當て、蒸すこと約四五分したら、取りのけて顔一面に艶肌劑……艶肌劑と云ふはクリームの

類で、これも漏脂性の人と、乾燥性の人とて用劑を一樣にする譯には参りません、甲者の場合でしたらマツサイジクリーム（先づ苦扁桃一〇、〇を脱皮搗碎して、これに卵黄三個、蜂蜜二〇〇〇、扁桃油二〇、〇及びベルガモット油三〇、〇、レモン油二〇、〇、丁香油二、〇を混合したものを加へて製したのがよいてせう）乙者でありましたらラノリンクリーム（無水ラノリン九、〇、白降汞〇、五、アントラゾール〇、三、安息香酸豚脂三、〇から成るのを御用ひなると）……を塗布して指頭でよく摺込み、後ち美濃の生紙か半紙又は絳絹で拭き取り、鼻端とか上顎とかの常に汗ばんでおしろいの剝げ易い邊に、ピネーグル（醋酸、安息香丁幾、カンケル丁幾各三、〇、酒精五〇、〇より成るものか若くはキセロロビネーグルをよしと致します）を塗り、

二三分間空気に乾かして、化粧下クリーム（キセロロクリームに優るものありません）をムラなく平らに付けるので、これまでは晝夜は勿論季節の如何に係らず、一樣の方式で御やりになつて差支ありません。

夜の化粧の仕方

斯くしてお化粧の土臺が出来上りました。いよいよ夜の化粧の本題に這入るのですが、それには又通常の場合と他不行の時とで、第一おしろいの打方に濃淡の差違があります。要するに單装の時は薄化粧、盛装した場合には厚化粧にせねば、お化粧が衣服に消されて了ひますから、その御心得で、お化粧の加減をなさることをお忘れになつては不可ません。それから電燈の光は化粧に蒼味を帯び

て見せしめ、瓦斯の光は一入濃く見するもので、さなきだに夜は陰影を強く描き出します結果として、その陰影とあしるいの白さが強き對照を致す爲めに、化粧が從つてヨリ濃厚に見えますから、夜間は晝間よりも一段薄目に御つけにならぬと、目立ち過ぎる嫌があります。取別け兩眼の上まぶたは極めて薄くホンノリと肉色あしるいを御打ちになつて、目尻に近き邊を目立たぬやう、軽く拭き取るのですが、これも嚴格に申せば御顔容によつて取捨せねばならぬのですから、その邊は皆様方各自に然るべきやう御考を願ふより仕方ありません。鼻は鼻根から中程までの低い部分の鼻筋にだけ、あしるいを打ちまして、それを鼻端にかけて刷りかけるだけ、間違つても鼻全體にコテ／＼と左官屋を極込まぬやう御注意なさること

が肝要であります。

鼻を高く見せる化粧

若し鼻を高く見せやうとて鼻全體にあしるいを打ちますと、顔一面の化粧が目立つて參るのみならず、鼻は只巾廣く際立つて見ゆるだけのことで、決して高く見ゆるものではありません。殊に夜の化粧に於いて鼻の兩側にあしるいを打つたり小鼻に少しでも濃く付きますと、光線の影射の爲めに、高くは見えずして大きく描き出されることになります。それから小鼻の兩側より口の左右にかけて、深い太い皺のある御方は、其皺の上に肉色あしるいを手際よく細く打ち込み、上顎を薄く化粧すべきであります。而して鼻の穴の側は、一段薄目になさらぬと常には格好のよい鼻でも、それが爲めに俗に

所謂視鼻の醜形を現出することになります。斯くしてあしらいとクリームとが能く落付き合つて乾きましたら、その上全體に別の眉刷毛で肉色あしらいを刷くのです。これを致しませんと顔に生氣を持たせることが出来ません。但しこれは瓦斯の光を浴びる場合の化粧の仕方、若し電燈の下に立つ時でしたら、先の化粧下クリームに紅色々素（紅や脂臘はいけません殊に紅を使ひますと紅ヤケがして顔にシミが発生しますから、カルミンかカルタミンを御用ひなさい）を薄桃色に見ゆる程煉合して御つけになつて、其上に前の如く總べて肉色あしらいで化粧をなすつて、それから後一面に白いあしらいを刷かねばなりません。眉黛の入方なども晝程に濃く造らぬやうになさい、殊に眉のヒカ／＼光る様な事がありましたは、折角念

を入れてお化粧なすつたのも、過半臺なしになつて了ひますから、夜の化粧の眉黛には青桐の小枝を焼いた炭墨で御引なさるが適法であると存じます。

和洋折衷の方法

要するに白晝の化粧の仕方と違つて、夜間の化粧法として心すべき點は、白晝の比して薄目に赤味を帯びさせるといふことです。而して茲に御話申した化粧の仕方に使用せるは、和洋折衷の式法に於ける粉あしらい（舶來酸化亜鉛二一、五、ウエチダタルク三四、五炭酸マクニシア三、五に千種花香水なり薔薇油なりを二滴加へて製します、又これを肉色に致しますには、右の粉あしらい五〇〇、〇に對しカルミン溶液〇、〇五を加へるのです、カルミンを溶液に致

しますにはアムモニアで溶解させなさい)の扮飾術で、煉あしるいを材料とする場合には、また自ら別途の仕方に依らねばならぬこと勿論で、それは前題に述べて置いた通りです。

尙夜の化粧として赤味を帯びさせねばならぬ譯は、色彩に對する觀念の對照と調和より割出されたもので、春てしたら氣候も暖かて人の顔にも自ら暖潮がみなぎつて居りますけれど、秋は暖かき燈火すらウスラ寒むく、周圍の風物すべてが冷たく感ぜられ、人の顔にも活氣が洗んで見えます。で、春なれば四邊の暖景に對照して原色素の發散した白色の化粧をするが宜しうございますけれど、秋は又見るもの總べてが寒色を呈して居るに對照せしめて、暖色たる帯赤の化粧をして活躍せしめねばならぬ理合ですから、時正に深秋

の季節たる今日此頃の夜の化粧としてこの方式に據るを至當と信ずるからのこととあります。

あはせ鏡終

明治四十四年十二月一日印刷
明治四十四年十二月五日發行

あはせ鏡
不許複製
定價卅五錢

著作者

藤波芙蓉

發行者

增田義一
東京市京橋區南紺屋町十二番地

印刷者

佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿七番地

印刷所

株式會社 英舍
東京市京橋區西紺屋町廿七番地

發行所

東京市京橋區
南紺屋町十二番地

實業之日本社

電話京橋八七四番八七五番
郵便振替貯金口座參貳六番

山方香峯君著

▲日常生活衣食住再版 定價壹圓廿錢 郵稅十二錢
大版上製金文字入

本書は衣食住に關するあらゆる智識の寶庫也。如何にして着るべきか、如何にして食すべきか、如何にして住むべきか。是等の間に對して總ての場合をつくりて明確詳細の答案を與ふ。

下田歌子 婦人禮法 四 定價壹圓五十錢
女史著 版 郵稅十貳錢

和洋兩式混用せらるゝ現代に最も適合せしむる様折衷して創始されたるものにして苟も社交界に立つ紳士淑女は是非一讀す可き書也

實踐女學校講師 長谷川、上村兩君著

▲刺繡獨習書 再版 定價卅五錢 郵稅六錢
大版 全壹冊

長谷川氏は學習院女學部を始め幾多の女學校に於て多年刺繡を教授せる斯界第一の人也。今や其の實踐に基きて初學獨習者の爲めに極めて平易懇切に説述す、尙説明の足らざる所は、明細なる圖を挿みて之を補ふ。前に就かずして能く斯術に通せんとせば本書を讀むべし。

實業之日本社發行圖書總目錄

●史傳地理

- 農法學博士新渡戶稻造君著序 山方香峯君著 大版上製美本 定價貳圓 郵留小包十八錢
- 十大德教家傳 大版上製金文字入 定價壹圓七十錢 郵稅拾貳錢
- 若宮卯之助君著 大版上製金文字入 定價壹圓七十錢 郵稅拾貳錢
- 米國史 大版上製金文字入 定價壹圓 郵稅八錢
- ルーズヴェルト原著法學士 遠山照君山崎梅處君共譯 大版上製金文字入 定價壹圓 郵稅八錢
- 偉人クロムウエル 大版上製金文字入 定價壹圓 郵稅八錢
- 農法學博士新渡戶稻造君序 山方香峯君著 大版金文字入 定價壹圓 郵稅八錢
- 新武士道 大版金文字入 定價壹圓 郵稅八錢

●同 三慶翁著 新編武士道實話 上製金文字入 定價八拾錢 郵稅八錢

●山方香峯君著 一國近世人傑傳 上製金文字入 定價八拾錢 郵稅八錢

●山方香峯君著 世人豪の片影 中版全一拾錢 定價五拾錢 郵稅六錢

●報知新聞記者佐瀨醉棧君著 當代の傑物 上製金文字入 定價六拾錢 郵稅八錢

●實業之日本記者石井白露君著 最近成功十傑 全一冊美本 定價五拾錢 郵稅六錢

顧田琴月君著 上製 金文字入 正價 六拾八錢
 ●偉人の少年時代 郵稅 八錢
 中野觀象君著 大版上製金文字入 正價 五拾五錢
 ●最新外國商業地理 郵稅 八錢
 宮田千年君著 大版上製金文字入 正價 六拾八錢
 ●世界商業史綱 郵稅 八錢
 大隈伯序 顧田琴月君新著 大版全一冊 正價 壹圓貳拾錢
 ●世界偉人傳 郵稅 拾貳錢
 加藤政之助君著 大版全一冊 正價 卅五錢
 ●滿洲處分 郵稅 六錢
 長谷川宇太治君著 中版全一冊 正價 卅五錢
 ●渡清案内 郵稅 四錢
 市吉徹夫君著 中版全一冊 正價 卅五錢
 ●地理と商品 郵稅 四錢

大隈伯序三宅有賀田中館 博士追懷文 薄田斯雲君著 大版全一冊 正價 五拾八錢
 ●天下の記者 郵稅 八錢
 鈴木光次郎君著 中版全一冊 正價 四拾錢
 ●現代名流奇談 郵稅 四拾錢
 桑谷克堂君著 大版全一冊 正價 五拾美錢
 ●成功富豪の面影 郵稅 六拾美錢
 秘訣 實業之日本社編纂 大版全一冊 正價 五拾美錢
 ●日富豪の家風 郵稅 六拾美錢
 京都大學圖書館員 佐竹義繼君編 上製 金文字入 正價 壹圓五拾錢
 ●幕勤王烈士手翰抄 郵稅 拾貳錢
 前カラチン女學堂教頭 一宮操子女史著 大版上製金文字入 正價 八拾錢
 ●蒙古土產 郵稅 八拾錢

●經濟產業書類

專修學校法政大學教師法學士 工藤重義君著 大版上製金文字入 正價 壹圓貳拾錢
 ●經濟財政要義 郵稅 拾貳錢
 米國エグルトン氏著 中版全一冊 正價 四拾錢
 ●處世經濟法 郵稅 四拾錢
 米國イリー博士 クキツクワ博士共著 大版上製金文字入 正價 壹圓八錢
 ●經濟學提要 郵稅 八錢

米國ゼンクス博士原著 別府丑太郎君譯述 大版上製金文字入 正價 八拾錢
 ●產業合同論 郵稅 八拾錢
 商業學士 小林行昌君 土屋長吉君共著 大版全一冊 正價 四拾六錢
 ●中等經濟學 郵稅 六錢
 土屋長吉君著 大版全一冊 正價 四拾六錢
 ●應用經濟學 郵稅 六錢
 淺井藤侃君著 大版全一冊 正價 四拾五錢
 ●最新農業經營 郵稅 六錢
 官入良右衛門君著 大版全一冊 正價 卅五錢
 ●經濟的育蠶法 郵稅 六錢
 カネギ一翁著 伊藤重次郎君譯 洋裝全一冊 正價 四拾六錢
 ●富の福音 郵稅 六錢

川上善兵衛君著
 ●葡 萄 提 要 大版上製金文字入
 正價壹圓八拾錢
 郵稅拾貳錢
 法學博士天野爲之君新著 菊版上製金文字入
 ●經 濟 策 論 正價貳圓五拾錢
 郵稅小包十八錢

●衛生書類

醫師武藤喜作君著
 ●家庭應急手當法 中版全一册
 正價四拾錢
 郵稅六錢
 報知新聞記者中村木公君著
 ●名家長壽實歷談 中版金文字入
 正價八拾錢
 郵稅八錢

英國グランウキル博士著 海嶽生譯
 ●簡 易 安 眠 法 中版全一册
 正價廿五錢
 郵稅四錢
 英國グランウキル博士著 海嶽生譯
 ●神 經 健 全 法 中版全一册
 正價廿五錢
 郵稅四錢
 蘆川忠雄君著
 ●頭 腦 明 快 法 中版全一册
 正價廿五錢
 郵稅四錢
 英國グランウキル博士著 蘆川忠雄君著
 ●最 新 記 憶 法 中版全一册
 正價廿五錢
 郵稅四錢
 醫學士椋田十次郎君著
 ●衛 生 十 二 月 中版全一册
 正價廿四錢
 郵稅四錢

四

東京朝日新聞記者杉村縱橫君著
 ●肺 病 全 快 談 中版全一册
 正價五拾錢
 郵稅六錢
 農學博士玉利喜造君著
 ●冷 水 浴 の 實 驗 と 學 理 中版全一册
 正價廿五錢
 郵稅四錢
 萬朝報記者 中島氣輝君著
 ●禁 酒 の 五 年 間 大版全一册
 正價廿五錢
 郵稅四錢
 醫學博士加藤照磨君校閱 西谷龍顯君譯著
 ●最 新 育 兒 法 全一册
 正價七拾美錢
 郵稅六錢
 英國ノールソン著海嶽生譯
 ●思 想 健 全 法 中版全一册
 正價四拾錢
 郵稅四錢
 蘆川忠雄君著
 ●心 機 轉 換 法 中版全一册
 正價廿五錢
 郵稅四錢

●商業實務書類

米國ウォルター、デー、ム
 ツデー著堀内新泉君譯
 ●店 頭 新 販 賣 術 大版全一册
 正價五拾錢
 郵稅八錢
 金澤商業學校長中野觀象君編
 ●實 業 文 練 習 帖 和山觀成君書
 正價六拾錢
 郵稅四錢
 土屋長吉君著
 ●商 戰 必 勝 中版全一册
 正價卅五錢
 郵稅六錢
 土屋長吉君著
 ●商 工 執 務 法 大版全一册
 正價五拾錢
 郵稅六錢
 カネギ一翁著 伊藤重次郎君譯
 ●實 業 の 鍵 大版全一册
 正價卅五錢
 郵稅六錢

前金澤商業學校長 永野耕造君著

●商業修身訓

正上中下三册
郵稅價四拾五錢

中野觀象君著

●實用商業書信文範

正大版全一册
郵稅價四拾八錢

商業學士 小林行昌君著

●英文商用文教科書

正大版上製金文字八
郵稅價四拾五錢

カノキ一翁著 小池靖一君譯述

●實業の帝國

附錄カノキ評傳
正價卅五錢
郵稅價卅六錢

カノキ一翁著 伊藤重次郎君譯

●富の福音

正洋裝全一册
郵稅價四拾八錢

男爵前島密序 澤村菊池兩君共著

●國民實業指針

正大版全一册
郵稅價五拾八錢

藤岡秀太郎君著

●商品と其荷造法

正大版全一册
郵稅價五拾六錢

惣崎貞夫君著

●生命保險提要

正大版全一册
郵稅價五拾六錢

市吉徹夫君著

●銀行と社會

正中版全一册
郵稅價廿五錢

土屋長吉君著

●商品と商業經營

正中版全一册
郵稅價卅五錢

土屋長吉君著

●最新販賣術

正中版全一册
郵稅價五拾六錢

土屋長吉君著

●商業繁榮策

正中版全一册
郵稅價五拾六錢

土屋長吉君著

●最新商業要綱

上製正價八拾
錢並製七拾
錢郵稅各八錢

土屋長吉君著

●簡易商業學

正上中下二册
郵稅價四拾八錢

中野觀象君著

●最新外國商業地理

正大版上製金文字八
郵稅價五拾五錢

宮田千年君著

●世界商業史

正大版上製金文字八
郵稅價六拾八錢

男爵後藤新平君序 西村正確君著

●最新事務法

袖珍上製金文字八
正價六拾六錢
郵稅價六拾六錢

商業學士小林行昌君 下平精一君共著

●英國商業實務

正大版上製金文字八
郵稅價壹圓廿錢
郵稅小包十二錢

實業之日本記者 都倉義一君著

●最新式記帳法

正大版全一册
郵稅價七拾八錢

六

中野觀象君著

●帳單式簿記

正大版全一册
郵稅價卅五錢

千代田生命保險會會計課長與石五太郎君著

●利廻早見表

正大版全一册
郵稅價卅五錢

近江屋質店員 奥村喜一郎君著

●新實業讀本

和裝全一册美本
正價廿五錢
郵稅價四錢

五十嵐次郎君著

●最新商業算術

上製金文字八
正價八拾八錢
郵稅價八拾八錢

西岡英太郎君著

●商賈と勘定

正中版全一册
正價四拾八錢
郵稅價四拾八錢

中野觀象君 高間昭君共著

●新商業書信活法

正大版全一册
郵稅價五拾八錢

七

●竹内正太郎君著
●商業簿記獨習書
郵正全一册美七拾八錢

●竹内正太郎君 村塚玄君共著
●最新商業範記
郵正大版全一册六拾一錢

●市吉徹夫君著
●地理と商品
郵正中版全一册廿五錢

●朝鮮日日新聞社著
●少資本の渡韓成功法
郵正中版全一册三十五錢

●桑谷克堂君著
●秘訣富豪の面影
郵正全一册美六拾錢

●篠田鏡造君著
●通俗小僧學問
郵正袖珍總振假名一册四拾錢

●西岡英夫君著
●立身の繁昌
郵正中版全一册廿五錢

●在米、柿西藤一郎君著
●米國の商店
郵正中版全一册五拾六錢

●修養書類

●盧川忠雄君著
●品性の勢力
郵正大版全一册壹金文字八錢

●米國前大統領ルーズヴェルト氏原著
●山崎梅處君譯述
●ルーズヴェルト全集
郵正大版全一册壹金文字八錢

●盧川忠雄君著
●自助の精神
郵正中版全一册四拾五錢

●波多野烏峯君著
●新自助論
郵正中版全一册五拾六錢

●岡三慶君著
●新編武士道實話
郵正上製全一册八拾錢

●波多野烏峯君著
●健全なる常識
郵正大版全一册壹金文字八錢

●盧川忠雄君著
●沈着心修養
郵正中版全一册四拾五錢

●盧川忠雄君著
●交際術修養
郵正大版全一册壹金文字八錢

●樋口配天君著
●默想
郵正中版全一册四拾五錢

●盧川忠雄君著
●日常の言語
郵正中版全一册四拾五錢

●高須梅溪君著
●人格の鍛鍊
郵正中版全一册四拾五錢

●高須梅溪君著
●偉人修養の徑路
郵正袖珍上製全一册五拾六錢

●雨宮敬次郎君著
●奮闘吐血錄
郵正中版全一册六拾一錢

●盧川忠雄君著
●意志の鍛鍊
郵正中版全一册四拾五錢

●盧川忠雄君著
●讀心術修養
郵正中版全一册四拾五錢

●盧川忠雄君著
●克己心の修養
郵正大版全一册壹金文字八錢

江口岳東君著
●人格の光輝 大版全一
郵税 八十一錢

獨逸マイアー氏著 波多野烏峯君著

●樂天の勝利 大版全一
郵税 四拾六錢

實業之日本記者 岳淵生著 (公開狀)

●新時代の青年 中版全一
郵税 四十一錢

文學博士井上哲次郎君校閱 植村道次郎君著

●教育勅語要義 大版全一
郵税 四十五錢

米國マーデン翁著 波多野烏峯君譯述

●快活なる精心 中版全一
郵税 四拾一錢

法學博士和田垣謙三君序 蘆川忠雄君著

●人生の慰安 大版全一
郵税 八拾一錢

島田三郎君序 蘆川忠雄君著

●常識の修養 大版全一
郵税 八拾一錢

男爵澁澤榮一君序 蘆川忠雄君著

●實務才幹訓練 大版全一
郵税 八拾一錢

男爵前島密君序 蘆川忠雄君著

●人生の奮闘 大版全一
郵税 六拾一錢

英國男爵エーヴベリ卿 ラボック著 正木照藏君譯

●人生の妙味 大版全一
郵税 八拾一錢

伯爵大隈重信君序 蘆川忠雄君著

●樂天の生活 大版全一
郵税 八拾一錢

實業之日本記者岳淵生著

●品性の光輝 中版全一
郵税 六拾一錢

蘆川忠雄君著

●心機轉換法 中版全一
郵税 四拾一錢

米國トマス、ラーチング氏著 堀内新泉譯述

●不平慰安法 大版全一
郵税 六拾一錢

蘆川忠雄君著

●觀察力修養 中版全一
郵税 四拾一錢

英國フリエス氏著 蘆川忠雄君譯述

●雄健の氣象 中版全一
郵税 四拾一錢

堀内新泉君著

●自彊術 中版全一
郵税 六拾一錢

蘆川忠雄君著

●決斷力修養 中版全一
郵税 四拾一錢

實業之日本臨時增刊

●勇者の世界 大版全一
郵税 二拾一錢

實業之日本臨時增刊

●人格の修養 大版全一
郵税 二拾一錢

蘆川忠雄君著

●人格の鍛鍊 中版全一
郵税 三拾一錢

佛國大問屋主人ビエール著 前田越嶺君譯述

●成功商才修養の實驗 中版全一
郵税 六拾一錢

實例

●青年立身訓 中版全一
郵税 四拾一錢

野田叱電君著

語學數學書類

- 鷹川忠雄君著 失敗の活用 中版全一冊 正價三拾五錢 郵稅四錢
- 高橋男序 波多野烏峯君著 實業自尊の修養 大版全一冊 正價八拾錢 郵稅八錢
- 藤原楚水君編 先哲座右銘全集 中版全一冊 正價壹圓 郵稅八錢
- 海老名彈正君著 新國民の修養 上製金文字入 正價壹圓 郵稅八錢
- ルーズヴェルト氏著 山崎梅處君 松宮春一郎君共著 奮闘の教訓 大版全一冊 正價壹圓貳拾錢 郵稅拾貳錢
- 龜法學博士 新渡戸稻造君著 養 大版上製箱入 正價壹圓七拾錢 郵稅十貳錢
- 慶應義塾々長 鎌田榮吉君著 獨立自尊 大版上製箱入 正價壹圓七拾錢 郵稅十貳錢
- 高橋五郎君著 英語正確使用法 上製金文字入 正價六拾錢 郵稅六錢
- 上海同文書院校友谷原孝太郎君著 日清英會話 上製紙函 正價壹圓 郵稅八錢
- 高橋五郎君著 英語熟達法 中版全一冊 正價五拾錢 郵稅六錢
- 高橋五郎君著 英語句讀法 中版全一冊 正價六拾錢 郵稅六錢
- 米國理學士大木新三君 鈴木精一君共著 新代數難問詳解 上製金文字入 正價七拾錢 郵稅六錢

- 渡邊徳兵衛君 小里運八君共著 實用珠算教科書 大版全一冊 正價五拾錢 郵稅八錢
- 高間、上田、中宮三君共著 最新珠算全書 大版全一冊 正價卅五錢 郵稅六錢
- 五十嵐次郎君著 最新商業算術 上製金文字入 正價八拾錢 郵稅八錢

婦人家庭書類

- 京都師範學校教諭 木内菊次郎君著 花ひすひ 大版全一冊 正價五拾錢 郵稅六錢

- 梅田嬌葉君著 和洋新案菓子製法 大版全一冊 正價五拾錢 郵稅八錢
- 報知新聞記者 中村木公君編 名流婦人のかかみ 大版上製金文字入 正價七拾錢 郵稅八錢
- 醫師 武藤喜作君著 家庭應急手當法 中版全一冊 正價四拾錢 郵稅四錢
- 實踐女學校講師 長谷川岩吉君述 刺繡獨習法 大版全一冊 正價卅五錢 郵稅六錢
- 京都師範學校教諭 木内菊次郎君著 折紙と圖書 大版全一冊 正價卅五錢 郵稅六錢
- 山方香峯君著 日常生活衣食住 大版上製金文字入 正價壹圓貳拾錢 郵稅小卅二錢

梅田燦葉君著
●家庭菓子製法 全一冊 美本 郵稅六拾錢

村井弦齋君著
●婦人の日常生活法 特別上製壹圓廿錢 郵稅拾貳錢 並製美本壹圓 郵稅八錢

石塚月亭君編 第一編第二編第三編三冊
●弦齋夫人の料理 正價各六拾錢 郵稅八錢

東京職工學校敎諭 本間鶴治君著
●通家庭理科 大版全一冊 郵稅七拾錢 中版全一冊 郵稅八拾錢

西谷龍顯君著
●俗家庭理科 大版全一冊 郵稅七拾錢 中版全一冊 郵稅八拾錢

西谷龍顯君著
●太龍の母の答 中版全一冊 郵稅四拾錢 質問にの母の答 中版全一冊 郵稅四拾錢

堀内新泉君著
●娘に與へたる母の書簡 前編四拾錢 郵稅六錢 後編五拾錢 郵稅八錢

報知新聞記者 天野誠齋君編

●家庭日常の實驗 大版全一冊 郵稅六拾錢

米國女記者ペエン氏著 實業之日本社翻譯
●女子處生訓 三百五十五頁 正價卅五錢 十餘頁 郵稅六錢

赤堀吉松、赤堀崇吉、赤堀菊子三君共著
●日本料理法 大版一冊 美本 郵稅七拾錢 中版一冊 郵稅八拾錢

婦人世界臨時增刊
●衣裳かがみ 菊版全一冊 郵稅壹拾五錢 中版全一冊 郵稅壹拾五錢

西谷龍顯君著
●婦人の重寶 大版全一冊 郵稅五拾錢 中版全一冊 郵稅五拾錢

加藤醫學博士校閱 西谷龍顯君譯述
●最新育兒法 全一冊 美本 郵稅七拾六錢

中島文學博士序 長野縣高等女學校校長 波多野市松君著
●子供の研究 大版上製金文字入 郵稅七拾錢 中版全一冊 郵稅八拾錢

三輪田眞佐子女史序 阿部長咲君著
●健全なる家庭 中版全一冊 郵稅廿五錢 大版全一冊 郵稅卅五錢

實業之日本社編纂
●日富豪の家風 全一冊 美本 郵稅五拾六錢 正價五拾六錢

日本石油會社會計課長 竹田常治君著
●實用會計簿記 大版全一冊 郵稅四拾六錢 正價四拾六錢

婦人世界臨時增刊
●食物かがみ 菊版全一冊 郵稅壹拾五錢 正價壹拾五錢

婦人世界臨時增刊
●婦人の慰藉 菊版全一冊 郵稅壹拾五錢 正價壹拾五錢

婦人世界臨時增刊
●樂しき婦人 菊版全一冊 郵稅壹拾五錢 正價壹拾五錢

木内菊次郎君著
●應用紙細工 大版全一冊 郵稅五拾八錢 正價五拾八錢

白井悦子女史著
●家庭衛生料理法 大版全一冊 郵稅五拾八錢 正價五拾八錢

松葉靜和女史著
●造花實習 大版全一冊 郵稅六拾八錢 正價六拾八錢

下田歌子女史著
●婦人常識の養成 大版全一冊 郵稅壹圓五拾錢 正價壹圓五拾錢

秤石齋文雅著
●諸流盆石指南 大版全一冊 郵稅六拾八錢 正價六拾八錢

讀賣新聞家庭記者 中村秋人君著
●兒童淚と鞭 中版全一冊 郵稅參拾五錢 正價參拾五錢

天野誠齋君著 ●家事實習法 大版全一拾六錢 郵正稅四拾六錢

米國婦人ウキルコックヌ女史原著 ●婦人の新修養 大版全一拾八錢 郵正稅五拾八錢

三津木春影君譯 ●婦人及男子の參考 大版全一拾八錢 郵正稅五拾八錢

村井弦齋君著 ●婦人及男子の參考 大版全一拾八錢 郵正稅五拾八錢

木内菊次郎君著 ●最新手工科教授法 大版全一拾六錢 郵正稅五拾六錢

文學士 堀田相爾君著 ●家庭教育の仕方 中版全一拾四錢 郵正稅四拾六錢

井上民子女史著 ●美談大和撫子 大版全一拾五錢 郵正稅四拾五錢

村井弦齋君著 ●少女讀本 大版全一拾八錢 郵正稅四拾八錢

讀賣新聞家庭記者 中村秋人著 ●幼兒情と躰 中版全一拾六錢 郵正稅四拾六錢

三津木春影君著 ●皇帝少年旅行 中版全一拾六錢 郵正稅四拾六錢

木村勉君編 ●古挿花の栞 大版全一拾五錢 郵正稅四拾五錢

東草水君著 ●夏やすみ 中版全一拾六錢 郵正稅四拾六錢

下田歌子女史著 ●婦人入禮法 大版全一拾五錢 郵正稅四拾五錢

波邊白水君著 ●少女美談 並製上稅各六拾五錢

村田天鎮君著 ●婦人の心理 大版全一拾八錢 郵正稅四拾八錢

富益、鈴木、田中君合著 ●實園藝全書 大版全一拾二錢 郵正稅四拾二錢

●處世書類

前田越嶺君著 ●生存競争法 大版全一拾八錢 郵正稅四拾八錢

蘆川忠雄君著 ●最良の機會 中版全一拾四錢 郵正稅四拾四錢

岡田孝吉君序 波多野烏峯君著 ●紳士と社交 上版全一拾八錢 郵正稅四拾八錢

シヨソソ氏著 山崎梅處君譯 ●向上的處世法 大版全一拾八錢 郵正稅四拾八錢

蘆川忠雄君著 ●日常の言語 中版全一拾四錢 郵正稅四拾四錢

ミラー博士著 波多野烏峯君譯 ●光榮ある生涯 中版全一拾六錢 郵正稅四拾六錢

マシエース博士著 江口岳東君譯 ●處世術修養 大版全一拾八錢 郵正稅四拾八錢

蘆川忠雄君著 ●樂天の生活 大版全一拾八錢 郵正稅四拾八錢

實業之日本臨時增刊 ●新時代の奮闘 大版全一拾八錢 郵正稅四拾八錢

實業之日本臨時增刊 ●樂天的處世法 大版全一拾八錢 郵正稅四拾八錢

實業之日本編纂 ●成功座右銘 中版全一拾六錢 郵正稅四拾六錢

男爵辻新次君序 波多野烏峯君著 ●逆境離脱策 大版全一拾八錢 郵正稅四拾八錢

米國エグメトソン氏著 蘆川忠雄君譯
 ●處世經濟法 中版全一冊 正價四冊 稅價四冊
 波多野烏峯君譯著
 ●處世の標準 中版全一冊 正價四冊 稅價四冊
 英國リッチー氏著 山崎梅處君譯
 ●富豪實驗教訓 大版全一冊 正價六冊 稅價六冊
 實業之日本臨時增刊
 ●同情の勢力 大版全一冊 正價六冊 稅價六冊
 波多野烏峯君著
 ●社會側面觀 上製金文字入 正價七冊 稅價七冊
 實業之日本社編纂
 ●處世座右訓 袖珍美本 正價貳拾錢 稅價貳拾錢
 實業之日本社編纂
 ●成功錦囊 中版全一冊 正價六冊 稅價六冊

蘆川忠雄君著
 ●應對談話法 中版全一冊 正價四冊 稅價四冊
 ゼローム氏著 波多野烏峯君譯
 ●表裏人生の真相 中版全一冊 正價四冊 稅價四冊
 米國富豪グラハム翁書信 實業之日本社編譯
 ●成功者處世教訓 中版全一冊 正價四冊 稅價四冊
 米國ジョン、グラハム翁著(右の原著)
 ●英文處世教訓 中版全一冊 正價四冊 稅價四冊
 實業之日本臨時增刊
 ●處世の金科玉條 大版全一冊 正價貳拾錢 稅價貳拾錢
 何原智波君著
 ●四書處世經典 袖珍美本 正價三拾六錢 稅價三拾六錢

●雜書類

大勳位伊藤公題字 大隈伯爵自序 江森泰吉君編
 ●大隈伯百話 大版上製金文字入 正價貳圓八拾錢 稅價貳圓八拾錢
 米國エール大學教授哲學博士 朝河貫一君著
 ●日本の禍機 大版全一冊 正價五拾錢 稅價五拾錢
 實業之日本記者 橋益生著
 ●獨笑珍話 袖珍美本 正價四拾錢 稅價四拾錢
 伯爵大隈重信君序 島田三郎君序 三宅馨君著
 ●都市の研究 上製金文字入 正價七拾八錢 稅價七拾八錢

山崎梅處君譯述
 ●ルーズヴェルト全集 大版上製金文字入 正價壹圓 稅價壹圓
 英國リチャードソン氏著 實業之日本社譯述
 ●最新讀書法 中版全一冊 正價四拾錢 稅價四拾錢
 山方香峰君著
 ●讀書便覽 三六版美本 正價四拾錢 稅價四拾錢
 實業之日本社編
 ●東西發奮の動機 上製金文字入 正價壹圓拾錢 稅價壹圓拾錢
 佐藤青吟君著
 ●學生の前途 中版全一冊 正價卅五錢 稅價卅五錢
 大隈伯爵 永井柳太郎君著
 ●氣質思ひ出の記 中版全一冊 正價八十一錢 稅價八十一錢

最新刊書籍

伯爵大隈重信君、島田三郎君序、三宅磐君著
 ●都市の研究 正製上 價七金八拾文字 郵稅八錢

高須梅溪君著
 ●滑稽趣味の研究 正中 價全六一 郵稅六錢

文學士 藤田篤君著
 ●實用文字便覽 正袖珍 價五十五 郵稅六錢

實業之日本社編
 ●優等學生勉強法 正袖珍 價四拾 郵稅四錢

加治木常樹君編
 ●西郷南洲書簡集 正大 價九十八 郵稅八錢

木村 勉君篇
 ●古挿花の栞 大版上製 價五拾美本 郵稅拾貳錢

三津木春影君譯
 ●皇帝少年旅行 正中 價全六一 郵稅六錢

柿西藤一郎君著
 ●米國の商店 正中 價全六一 郵稅六錢

東草水君著
 ●夏やすみ 正中 價全六一 郵稅六錢

下田歌子女史著
 ●婦人の禮法 正大 價壹圓五拾 郵稅拾貳錢

村田天嶺君著
 ●婦人の心理 正大 價六拾 郵稅八錢

渡邊白水君著
 ●少女美談 正製上 價七拾五錢 郵稅六拾錢

島田元麿、東草水合作
 ●青鳥 中版 正價卅錢 郵稅四錢

星野水裏君著
 ●口語詩濱 千鳥 中版 正價廿五錢 美本 郵稅四錢

農法學博士 新渡戸稻造君著
 ●養 正大 價壹圓七十錢 郵稅十二錢

慶應義塾々長 鎌田榮吉君著
 ●獨立自尊 正大 價壹圓七十錢 郵稅十二錢

富益、鈴木、田中君合著
 ●實用園藝全書 正大 價貳拾圓 郵稅貳圓

讀賣新聞記者 松川次郎君著
 ●南米と南洋 正中 價五拾 郵稅六錢

手紙雜誌主幹 桑田春風君著
 ●男女家庭書簡 中版 正價七十錢 郵稅八錢

文學士 岩佐重一君著
 ●烈婦の面影 大版 正價七十錢 郵稅八錢

高須梅溪君著
 ●新時代普通文中 中版 正價五十錢 全一冊 郵稅六錢

新渡戸、坪内、和田垣三博士監修
 ●英俗語熟語故事大辭典 上製大版 正價四圓五十錢 春皮美本 小包送料十八錢

報知新聞記者 鹿島櫻堂君著
 ●江藤新平 中版 正價四十錢 全一冊 郵稅六錢

篠原祿次君著
 ●地方青年團の組織及事業 中版 正價五十錢 全一冊 郵稅六錢

土屋長吉君著 ●實踐會計整理法 大版正價五十錢 全一冊郵稅六錢

嬌溢生著 ●名士奇聞 錄三五版正價五十錢 頗美本郵稅六錢

文學博士 谷本富君著 ●女子教育 大版正價壹圓 八錢

日本女子大學校長 成瀬仁藏君著 ●進步と教育 大版正價七拾錢 上製郵稅十錢

高濱虛子著 ●小朝 鮮 目下印刷中

井上民子女史著 ●山田琴歌詳解 目下印刷中

藤波芙蓉君著 ●合 鏡小版正價卅五錢 頗美本郵稅六錢

農法學博士 新渡戸稻造君著 ●世渡の道 目下印刷中

兒玉花外君著 ●英雄日本男兒 小版正價四十錢 美本郵稅六錢

京都大學助教授河上肇君著 ●經濟と人生 大版正價壹圓 上製郵稅八錢

日本少年主筆瀧澤素水君著 ●冒險怪洞の奇蹟 大版正價卅五錢 全一冊郵稅六錢

品川卯一郎君著 ●最新賣出し法 目下印刷中

實業之日本社編 ●英語熟達日記 目下印刷中

文法學博士男爵加藤弘之君著 ●自然と倫理 目下印刷中

實業之日本 發行

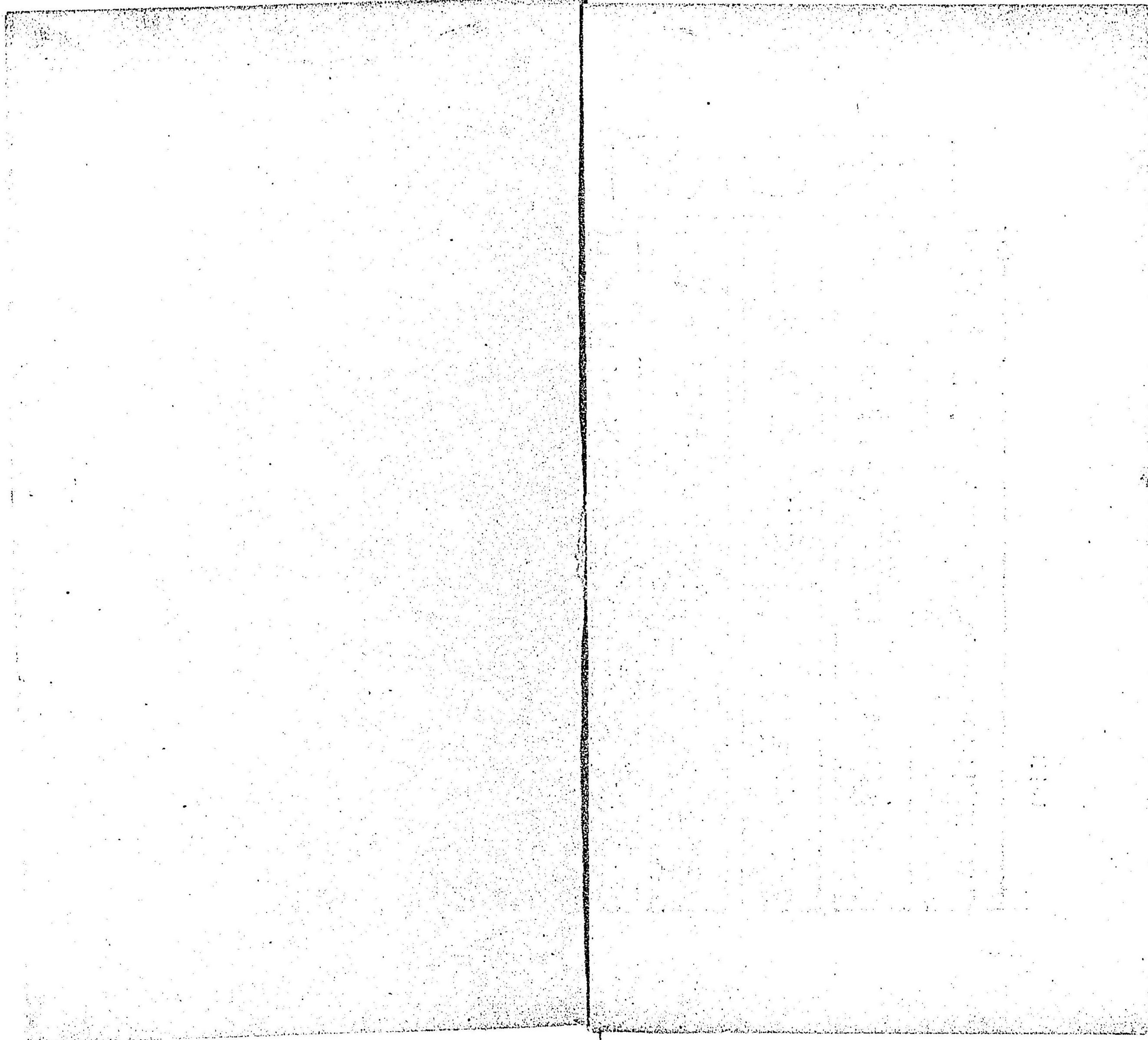
▲實業之日本 一冊拾壹錢郵稅一錢 ▲每月二回一日十
五日發行春秋二回增刊 ▲半年分增刊郵稅
共壹圓五十五錢 ▲一年分增刊共三圓

▲婦人世界 一冊拾五錢郵稅一錢五厘 ▲每月一回一
日發行春秋二回增刊 ▲半年分增刊郵稅共
壹圓五錢 ▲一年分增刊共貳圓五錢

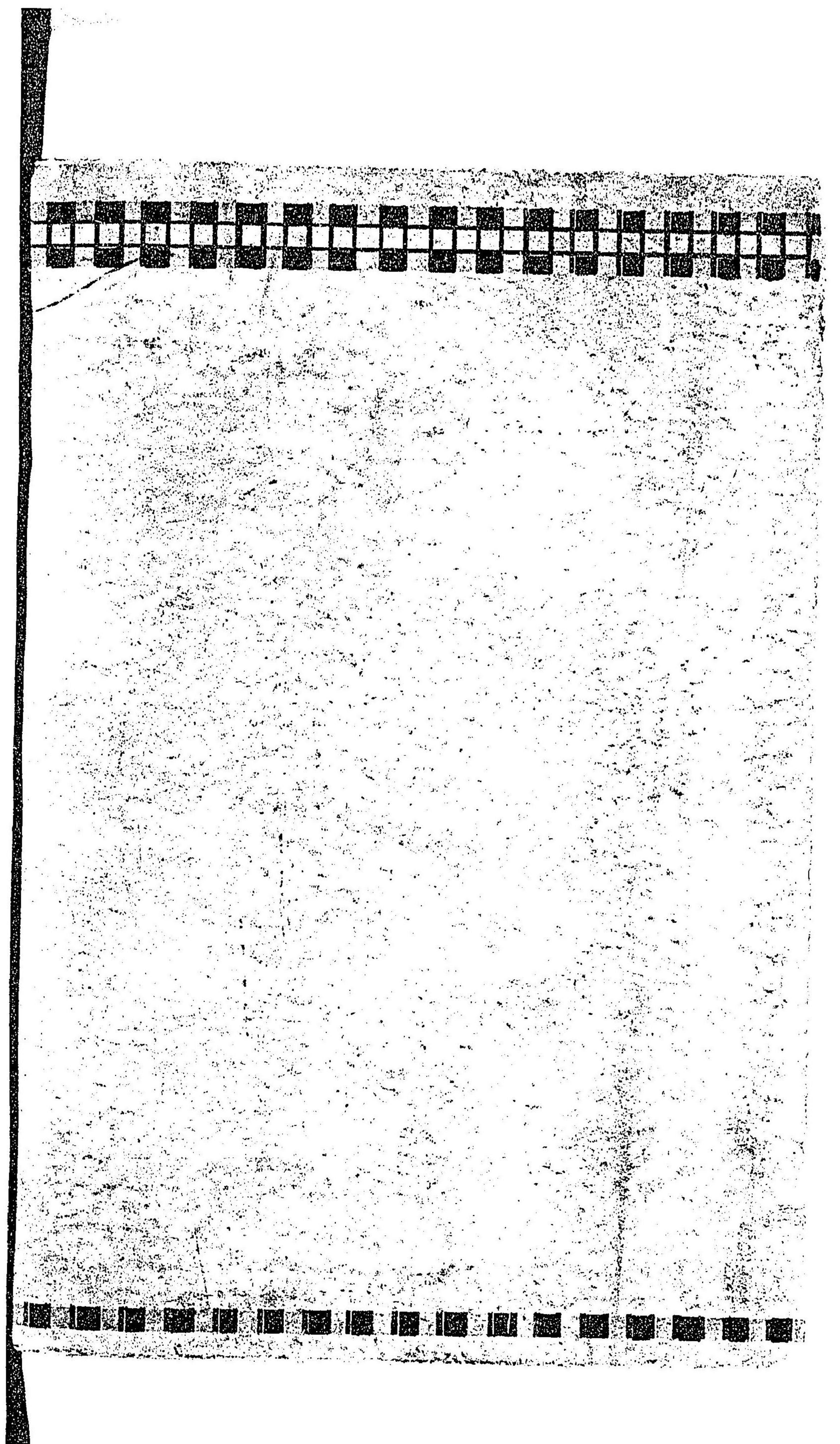
▲日本少年 一冊拾錢郵稅一錢 ▲每月一回一日發行
春秋二回增刊 ▲半年分增刊郵稅共七十錢
▲一年分同壹圓三十五錢

▲少女の友 一冊拾錢郵稅一錢 ▲每月一回一日發行
春秋二回增刊 ▲半年分增刊郵稅共七十錢
▲一年分同壹圓三十五錢

▲幼年の友 一冊拾錢郵稅五厘 ▲每月一回一日發行
▲六冊郵稅共五十八錢 ▲十二冊同壹圓拾
錢



303
266
639





068724-000-2

特62-425

あはせ鏡

藤波 芙蓉/著

M44

CDO-0001

